

Timeline of British and American History

英米史略年表

(紀元前)	
600 年頃	ブリテン島に大陸からケルト人が移住 (→p.12)
55 年～4	ローマの将軍カエサル、ブリテン島に侵攻 (～ 54) このころ、イエス・キリスト誕生
(紀元後)	
43	ローマによるブリテン島支配が始まる (→p.13)
409	ローマ軍、ブリテン島より撤退
597	ローマの宣教師アウグスティヌスによるキリスト教の布教 始まる
800	このころからバイキングの侵攻が始まる (→p.14)
871	アルフレッド王即位
1016	デンマーク王クヌート (Canute) がイングランドを征服、 王位に就く
1066	「ノルマン征服」で、ウィリアム 1 世即位 (→p.15)
1215	ジョン王、マグナカルタを認める
1337	英仏間の「百年戦争」始まる (～ 1453) (→p.16)
1348	黒死病、猛威を振るう (→p.17)
1455	「ばら戦争」始まる (～ 85) (→p.16)
1509	ヘンリー 8 世即位 (～ 47)
1534	国教会 (Church of England) 成立、ローマ・カトリック 教会と絶縁
1558	エリザベス 1 世即位 (～ 1603)
1588	ドレイク、スペインの無敵艦隊を破る (→p.18) このころ、劇作家シェイクスピアが活躍
1600	東インド会社が設立され、東洋との直接貿易始まる
1607	イギリス人が初めてアメリカに入植し、現在のバージニアに 植民地ジェームズタウン (Jamestown) を設立
1620	ピルグリム・ファーザーズがアメリカに移住 (→p.19)

1640	ピューリタン革命（～60）
1649	チャールズ 1 世が処刑され、イングランド共和国成立
1660	王政復古（the Restoration）で、チャールズ 2 世即位（～85）
1665	ロンドンで黒死病が大流行（→p.17）
1666	ロンドン大火で、市街の 80% が焼失
1688	名誉革命（the Glorious Revolution）始まる（～89）
1707	イングランドとスコットランドが合同し、グレートブリテン連合王国が成立
1775	アメリカ独立戦争始まる（→p.20）
1776	アメリカ独立宣言が採択される（→p.20）
1789	フランス革命勃発
1801	イギリス、アイルランドと合同
1815	ウェリントン、ワーテルローの戦いでナポレオン軍を破る
1830	リバプール・マンチェスター間に鉄道が開業し、鉄道時代がスタート
1837	ビクトリア女王即位（～1901）
1840	アヘン戦争勃発（～42）
1845	アイルランドで大飢饉（～46）
1851	ロンドンで第 1 回万博（ロンドン大博覧会）開催
1861	アメリカで南北戦争始まる（→p.21）
1914	第一次世界大戦始まる（～18）
1939	第二次世界大戦始まる（～45）
1952	エリザベス 2 世即位
1960	アメリカで公民権運動（→p.23）
1965	ベトナム戦争（～75）
1989	「ベルリンの壁」崩壊
2019	世界各地で「新型コロナウイルス感染症」（COVID-19）が発生

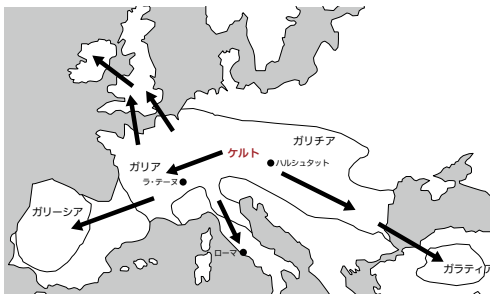
Celtic Migration

ケルト人の移住

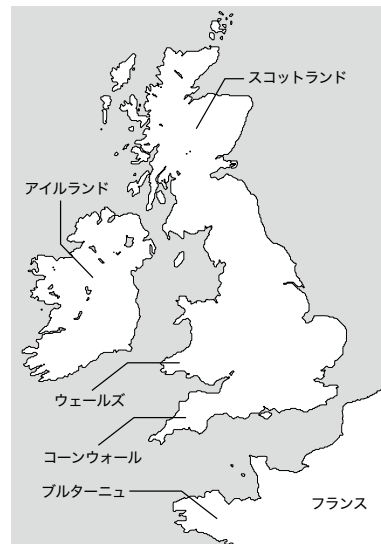
1) 現在のブリテン島 (Britain) には、古代から中世にかけて何度も大陸の異民族が侵入した。紀元前からブリテン島に移住していたのはケルト人 (Celts) で、のちに「ブリトン人」(Britons) と総称された。彼らの土地の大部分は1世紀半ばから5世紀初めまでにローマの属州となり、彼らの末裔は現在、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、イングランド南西端のコーンウォール (Cornwall)、そして北フランスのブルターニュ地方などに残存している。

2) ケルト人は紀元前6世紀から3世紀にかけてヨーロッパ大陸の広い地域に分布していた。彼らは鉄器を使うなど、優れた文化を持っていたが、文字を持たなかったので、詳しいことはわかっていない。靈魂不滅の信仰や、妖精伝説、そして美しい工芸品などの独特の文化でも知られる。

3) ケルト文化の中心にはドルイド (Druid) という司祭がいた。ドルイドは預言者であり、妖術師、詩人でもあったとされる。ドルイドによる祭礼は森で行われ、大樹となるオーク (oak) やヤドリギ (mistletoe) などが神聖視された。
→ oak、mistletoe (ともに第10章)



ケルト人の移動



現在、ケルト民族の末裔が住んでいるところ

Roman Rule of Britain

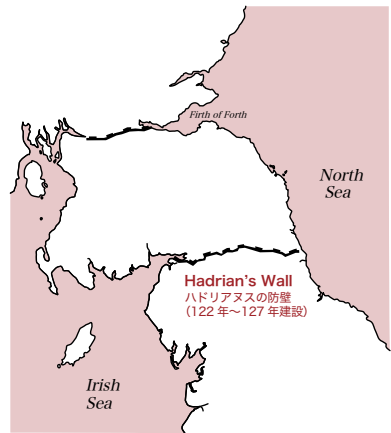
ローマによるブリテン島支配

1) 紀元前 55 年と 54 年にローマの将軍カエサル (Julius Caesar) はブリテン島へ遠征する。しかし、ブリトン人を完全に打ち破ることはできなかった。それから約 100 年後の紀元 43 年、ローマの皇帝クラウディアスが大軍を率いて侵攻し、紀元 1 世紀末にはローマはブリテン島の大半を支配し、ローマの属州とした。ただ、現在のスコットランドを含む北方地域までは支配できず、北方のピクト人 (Picts) などの侵入に備えるために、全長 118 キロに及ぶ「ハドリアヌスの防壁」(Hadrian's Wall) を築いた (Hadrian とはローマ五賢帝の 1 人である Hadrianus の英語名)。この防壁は、のちにイングランドとスコットランドの境界線になった。ローマはすぐれた土木技術によってブリテン島全土に都市を築き、道路や橋を整備したが、ローマ帝国の瓦解とともにブリテン島から撤退した (409 年)。

2) ブリテン島からローマが引き揚げた後、5～6 世紀末にブリテン島に入ってきたのは、大陸の民族大移動の余波に乗ったゲルマン系の諸部族である。具体的にはアングル人 (Angles)、サクソン人 (Saxons)、ジュート人 (Jutes) を指す。彼らはほぼ現在のドイツ北部からデンマークのあたりに住んでいて、類似した言語を話していた。この言語がブリテン島に持ち込まれ、のちに English (英語) と呼ばれるようになった。English とは Angle (アングル人) に接尾辞 -ish を付けたもの。また England は「アングル人の土地」の意味である。



ハドリアヌスの防壁



1 the Bible 聖書

●聖書とは何か？

1) Bible という語はギリシャ語の biblia に由来する。biblia とは「小さな書」を意味する biblion という語の複数形で、「多くの書」の意である。それがラテン語を経て英語の Bible となった。つまり、もともと 1 冊の本だったわけではなく、多くの文書を集大成したものである。

2) 聖書は「旧約聖書」(the Old Testament) と「新約聖書」(the New Testament) から成る。「旧約聖書」はユダヤ教の聖典で、39 の文書から成る。「新約聖書」はキリスト教の聖典で、全 27 巻である。この「約」は「契約」の「約」という意味である。神との古い契約が「旧約」であり、新しい契約が「新約」であるが、これはキリスト教の視点からの呼び名であって、イエスを救世主として認めていないユダヤ教では旧約聖書だけが聖典である。なお、testament とは「誓約」という意味で、ユダヤ人は宗教を神（ヤハウエ Yahweh）と自分たちとの間の「誓約」と考えたのである。

① 旧約聖書について

旧約聖書は、1000 年以上の年月をかけて編さんされた異なった書物の複合体で、中心はイスラエル民族（ユダヤ人）がたどった歴史物語である。旧約聖書では、神はユダヤ人に対して、「律法」と呼ばれる厳しい戒律を守るように要求する。人間が律法を守れば神は人々に祝福を与え、守らなければ罰を与える——これが神との「契約」、すなわち「誓約」である。そして、この契約が「イエスを信じることによってすべての人は救われる」という新しい契約に更新されたとするのがキリスト教の思想である。なお、旧約聖書は主にヘブライ語で書かれていて、以下の 39 の文書から成る。

旧約聖書	モーセ五書 (5 巻)	創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記
	歴史書 (12 巻)	ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記 (上)、サムエル記 (下)、列王記 (上)、列王記 (下)、歴代誌 (上)、歴代誌 (下)、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記
	詩書 (5 巻)	ヨブ記、詩篇、箴言、コヘレトの言葉、雅歌
	大預言書 (5 巻)	イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書
	小預言書 (12 巻)	ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、セファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書

～旧約聖書の物語から～

Adam and Eve

アダムとエバ

1) 旧約聖書の冒頭の書である『創世記』(Genesis)によると、神はアダマー(「土のちり」の意)から人類最初の男アダム(Adam)を作り、生命を与えて「エデンの園」(the Garden of Eden)に住ませた。さらに神は「人がひとりであるのは良くない。彼のためにふさわしい助け人を作ろう」と、男の肋骨を1つ取り出して、これから女を作った。これがエバ(Eve)である(英語では/イーヴ/と発音する)。こうしてエバは人類最初の女となり、アダムの妻となった。

2) エデンの園は何ひとつ不自由のない楽園であったが、ただ1つ神から禁じられていることがあった。それは、園の中央にある木の実だけは食べてはいけない、ということだった。ところがある時、蛇がやって来て、まずエバをそそのかし、夫のアダムとともにこの「禁断の木の実」(forbidden fruit)を食べさせてしまった。その結果、彼らは楽園を追放され、アダムは「労働の苦しみ」を、エバは「産みの苦しみ」を味わうことになった。英語の labor (労働) に「陣痛」という意味があるのはこの故事に由来するとされる。なお、forbidden fruit は比喩的に「禁じられた愉しみ」の意で用いられる。→ **snake** (第9章)

3) エデンの園で「禁断の木の実」を食べたアダムとエバは、自分たちが裸であることに気づいて、羞恥心からイチジクの葉(fig leaves)をつづり合わせて腰布を作り、腰の周りを隠そうとした。古代彫刻などの裸体にイチジクの葉が用いられているのはこの故事に基づくとされる。

4) イギリス 17 世紀の詩人ミルトン(John Milton)の叙事詩『失楽園』(*Paradise Lost*, 1667) は、このアダムとエバの楽園追放の物語を題材としている。

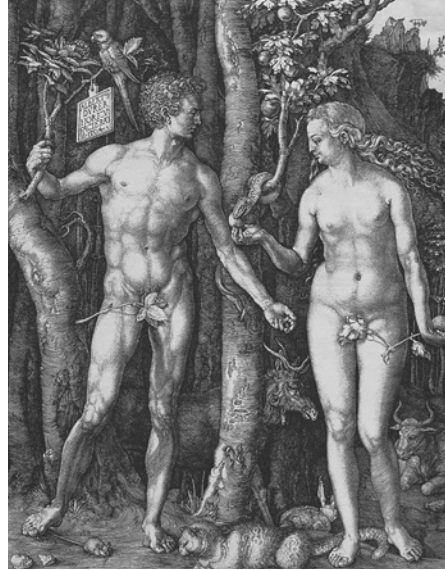
COLUMN

「原罪」(original sin) について

「人間は生まれながらにして罪(sin)を背負っている」とするキリスト教の思想で、西欧最大の神学者アウグスティヌス(354～430)から始まったとされる。アダムとエバが蛇にそそのかされて禁断の木の実を食べたことから人類の堕落が始まったという考え方で、この罪は全人類に遺伝しているとする。そして、この罪をつぐなってくれたのがイエス・キリストであるとするのがキリスト教の考え方である。なお、sin は宗教・道徳上の罪を指し、法律で罰せられる罪(crime)とは異なることに注意。



ルーベンス「アダムとエバ」



デューラー（版画）

Cain and Abel

カインとアベル

1) カインはアダムとエバの長男で、2番目の子どもがアベルだった。長男のカインは成長して農夫となり、弟のアベルは羊飼いになった。カインは自分で育てた農作物を、アベルは羊の初子（ういご）を神にささげた。しかし、神はカインのささげ物にはいい顔をせず、アベルの羊にだけ目を留めた。神に無視されたカインはアベルをねたみ、野に誘い出してアベルを殺してしまう。

2) 神はカインを責めて、「もはや大地はおまえに実りをもたらさない。おまえは地上で放浪する者になるだろう」と告げる。カインは追放されてエデンの東にあるノド（Nod）という所に住むことになる。しかし、慈悲深い神は「カインを殺す者は7倍の復讐を受けるだろう」と言って、カインの額に1つの印を付ける。この印は a [the] mark of Cain と呼ばれ、本来はカインを守るために神がカインの額に付けたものだが、現代英語では「殺人者の印」「罪を犯したことの印」の意味で用いられることが多い。

3) カインとアベルの争いの話を農耕民と遊牧民の争いと解釈する人もいる。また、Cain and Abel は「兄弟間の競争」の意味でもよく用いられる。なお、英語では Cain は / ケイン /、Abel は / エイバル / と発音することに注意。

<参考>

『怒りのぶどう』(The Grapes of Wrath)などで知られるアメリカの作家スタインベック(John Steinbeck;1902～68)が書いた小説『エデンの東』(East of Eden, 1952)はカインとアベルの話がモチーフになっている。また、この小説はジェームズ・ディーン(James Dean;1931～55)の主演で映画にもなり大ヒットした。



ルーベンス
「アベルを殺すカイン」

Noah's Ark

ノアの箱舟

1) ノア(Noah)とその一族が巨大な箱舟(ark)に乗って大洪水から救われたという物語。『創世記』(6～9章)に登場する。

2) アダムとエバの子孫は増えていったが、地上には人間の悪がはびこるようになっていた。それで、神は地上に人を作ったことを後悔し、洪水を起こして人類を滅ぼすことにした。しかしノアは信仰深い「正しい人」だったので、神は彼とその家族だけは救済することにした。神はノアに大きな箱舟を作らせ、その舟にノアの家族と、さまざまな「清い」動物のつがいに乗せることを命じた。

3) 40日もの間雨が降り続き、大洪水によって地上のすべての生き物は滅びたが、箱舟の中にいたノアの一族だけは生き残った。150日後に水はやっと減り、箱舟はアララト(Ararat)山の上に止まった。ノアは水が完全にひいたかどうかを確